

「古事記・風土記に見る日本海文化」

講師 立正大学文学部

教授 三浦 佑之 氏

1. 古事記と神話

古事記を読んでいく時、大和を中心にした世界を見ていただけではなかなか理解できないものが多い。ところが、オホクニヌシやヌナカハヒメといった神々の神話を、歴史学や考古学の助けを借りながら読んでみると、日本海文化がはっきり見えてくるのであり、それは古事記の神話を考えている私にはとても興味深い。ここでは、そんなことをお話ししてみたい。



古事記は上巻・中巻・下巻の三つに分かれており、そのうち上巻は神話となっている。大まかな内容は次に述べるとおりである。まずイザナキとイザナミがたくさんの島と神々を生む。そしてイザナミが火の神を生んだ後に死んで黄泉の国へ行き、イザナキが迎えに行くのだが逃げ帰ってきてしまう。その後イザナキは一人で禊をして、アマテラス、ツクヨミ、スサノヲという三貴子を生む。その後アマテラスとスサノヲが中心となり、神々の天空世界、すなわち高天原での物語が続いていく。この二人は姉と弟に当たるのだが対立し、スサノヲが乱暴をはたらくことによってアマテラスは天の岩屋にこもってしまう。その後、アマテラスを引き出すためにさまざまな祭りが行われる。そして、スサノヲは高天原から追放されてしまい出雲に降りる。その出雲でスサノヲはヲロチ退治をし、クシナダヒメと結婚して神々が誕生する。物語は、その六代目であるオホナムチ（別名ヤチホコ、オホクニヌシ）を中心に続いていく。そして、ヤチホコがヌナカハヒメと結婚するという物語が出てくる。ヤチホコの周りにはさまざまな女が絡み、子孫が大繁栄したと語られている。

ところが、そこへ高天原からアマテラスの使者たちが現れる。彼らは地上を自分たちの世界だといって譲渡を迫るといふ「国譲り神話」が描かれる。アマテラスの使いから国譲りを迫られたヤチホコは、「立派な御殿を造ってもらえるのであれば、大人しくしている」と誓いを立てて服属するという。その後アマテラスの孫に当たるニニギという神が高天原から降りてきて、地上世界は天空の神々によって統一され、ウガヤフキアエズという神が誕生し、その子カムヤマトイハレビコが初代の天皇になる。その後は天皇たちの物語となっている。

2 . 日本書紀には書かれていない神話

この中で最も興味深いのは、出雲神話といわれている部分である。特徴的なのは、日本書紀ではこの神話の部分が全くといっていいほど記載されていないのに、古事記の中では出雲神話が 25% を占めているということだ。これはやはり、古事記においては出雲がそれだけ重要だったということだろう。この神話を見ていくと、出雲と高志とのつながりが非常に強く表れていることに気付く。出雲と高志という地域が日本海を通してつながっていること、そしてそれは日本書紀などではどうも隠しておきたい、消してしまいたい出来事だったのではないかとも見えてしまうのだ。そもそも古事記はどのような目的で作られたのかがはっきりしていない。序文にはいろいろ書かれているが、私は序文どおりではないと考えている。日本書紀とは違って、古事記の成り立ちについては、恐らく大和を中心とした律令国家の論理とは違う別の論理が働いているのではないだろうか。

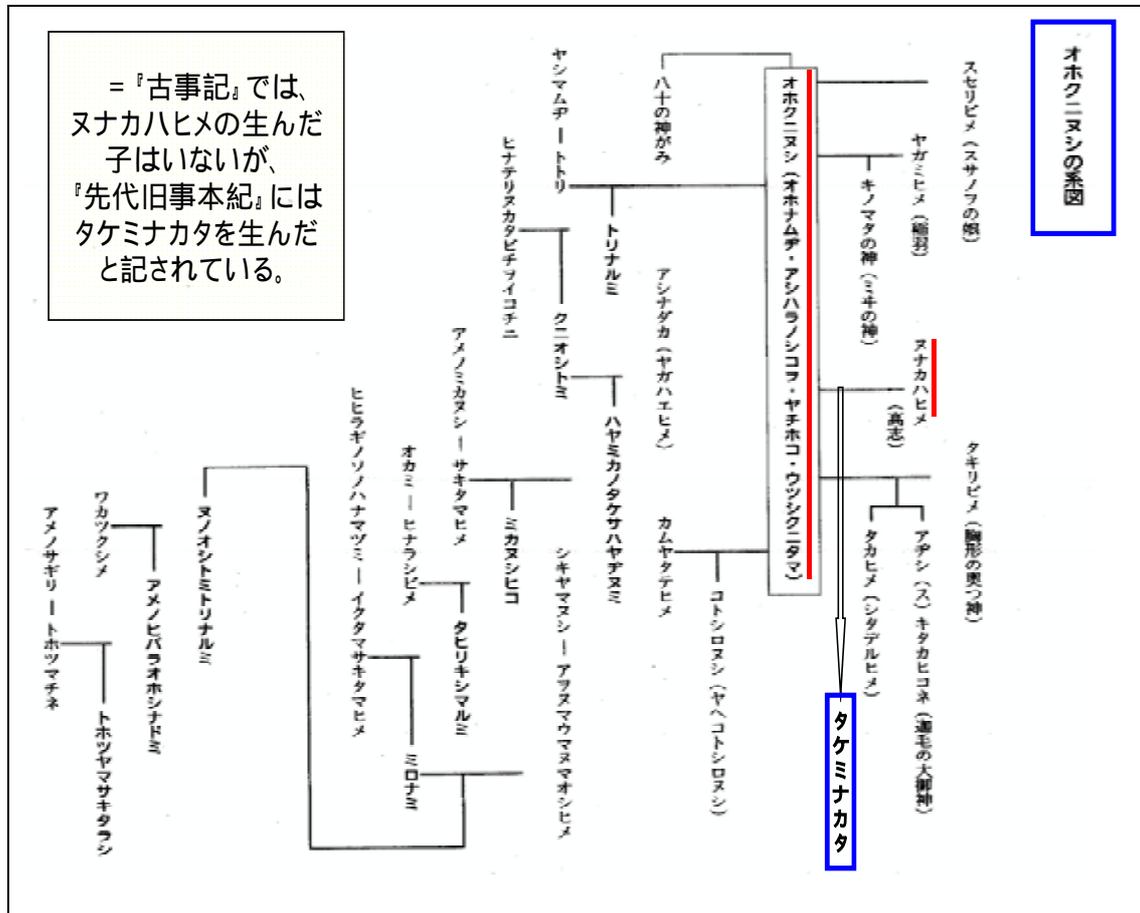
一般的にとらえられている考え方は、大和を中心として東に伊勢、西に出雲が置かれているというものである。大和の東西に二つの地域が振り分けられているのだ。つまり神話の論理としては、西側である出雲は陽の沈む暗黒世界として考えられているのである。確かに古事記にはそういう考え方がある。ただ、出雲神話や現実の出雲を見ても、またここ 10 年の研究の成果を見ても、出雲にはヤマトとは別の文化圏があったのではないかと考えられるのである。

そして出雲世界は高志の他に、諏訪とも強く結び付いている。それもやはり日本海を通してつながっているからだろう。姫川を遡って諏訪へつながるといふルートが縄文時代から存在したのである。

3 . 出雲と諏訪との関係

古事記は、出雲の神々についての詳細な系譜を持っており、その詳しさは天皇家の系譜をはるかにしのぐものである。その系譜に記されているのが、オホクニヌシと高志の女神

又ナカハヒメだ。オホクニヌシはさまざまな名前で登場し、いろいろな女神と結婚するのだが、又ナカハヒメはそのうちの一人として記されている。二人の間にできた子供に関しては古事記に出てこないが、先代旧事本紀や出雲国風土記にはタケミナカタとミホススミを生んだと記されている。タケミナカタの話は古事記だけに伝えられており、それを見ていくと、出雲を重んじていることが大変よく伝わってくる。



国譲り神話では、タケミナカタの父であり葦原中国(出雲)を支配していたオホクニヌシが、高天原から降りてきたタケミカツチに国譲りを迫られるくだりが描かれている。オホクニヌシは、息子たちさえよければタケミカツチの言うとおりに服属するという。そこで長男コトシロヌシが同調して服属した後、次男のタケミナカタがやってきて、タケミカツチに向かっていく。しかし、いざ手の握り比べをしたら、その力におじけづいて恐れをなし、諏訪へ逃げてしまう。その後タケミカツチに追いかけて殺されそうになったとき、タケミナカタはとうとう観念して父と兄の言うとおりにすると伝えて服属する。そのようにして、強大な地上世界の中心であった出雲はタケミカツチによって征服されたのである。そしてオホクニヌシが、「大きな建物を造ってくれば、そこに住んで外へは出ない」と約束したため、出雲大社という大きな社が作られたとされている。出雲は天皇の治める国となり、これが天皇によって出雲大社が建立される起源になったといわれている。しかし、本当にそうなのかという疑問が残る。天皇が関与する前に、出雲大社には、もう一つの

別の歴史や文化があったのではないかと考えられるのだ。

また、タケミナカタは力を発揮できないまま諏訪に追い詰められたというが、出雲から出ていく何らかの理由がもっと他にあったのではないだろうか。これまで古事記研究では、タケミナカタがどのようなルートを通して出雲から諏訪へ行ったのかがあまり真剣に考察されてこなかった。一般的には、「すべての道はローマへ通じる」というように、どこへ行くにも大和を経由するのだという発想をしまいがちなのだが、タケミナカタは日本海を通して諏訪へ行ったのではないだろうか。大和を通る陸路を取るよりも、日本海を真っ直ぐに船で突っ切っていった方が合理的なのである。

諏訪湖の北側には、諏訪大社の下社春宮と下社秋宮という二つの神社がある。南側には諏訪大社の上社本宮と上社前宮が位置している。つまり諏訪大社は諏訪湖を挟んで北と南にあるわけだが、この主祭神がタケミナカタなのである。このことから、出雲、高志、諏訪が日本海を通してつながっていると考えることはできないだろうか。やはり日本海文化という問題を古代文学においてきちんと考えないと、出雲神話を読み解くことはできないと思うのである。

4 . 日本海文化の特徴

日本海文化の特徴は大きく分けて四つある。

一つ目は、四方の隅が飛び出しているような四角い形の古墳、すなわち四隅突出型方墳が造られていたことだ。これは日本海側、特に出雲、富山地域などを中心に分布しているもので、島根県安芸市の仲仙寺 9 号墳が代表的な例である。二つ目は、取っ手の部分に特徴のある素環頭鉄刀が多く見られることだ。島根県雲南市の神原神社古墳から出土されたものは、現在島根県立古代出雲歴史博物館に展示されているので見ることができる。三つ目は巨木を建てるという文化で、特に青森県の三内丸山遺跡の六本柱や島根県の出雲大社が有名だ。新潟県糸魚川市の旧青海町における寺地遺跡もそうである。出雲大社の現在の高さは千木（ちぎ）まで 24 メートルだが、中世には 48 メートルもあって当時最大の建造物であったといわれている。そして、それを証明するように、2000 年には拝殿下から巨大な三本柱が発掘されている。そして四つ目は翡翠をめぐる玉造文化である。翡翠の産地である糸魚川周辺が、古事記を読んでいく上で大変重要なポイントになる。このような問題を考えていくことによって、日本海というものが非常に大きく浮かび上がってくるのではないだろうか。

諏訪大社では 7 年に 1 度、四隅に柱を建てて御柱祭が行われる。また、神は山を目印にして降りて来るという考え方もある。つまり、神は人間の世界にいつも存在しているとい

うわけではなく、ときどき柱や山を目印にして天から降り立ち、そこで人々の祈りを聞いて帰っていくものだという考えが強いのだろう。柱が神を迎えるという点においては、出雲大社も同じである。先ほど古事記で読んだオホクニヌシがタケミカツチに要求した大きな社の話とも通じるのだが、巨木を建てて神を天空から迎えるという儀式が行われていたのではないかと考えられる。そして三内丸山遺跡の柱も神の祭りにつながっているのだと思う。

日本海文化の特徴である巨木にかかわる文化と諏訪大社の御柱が密接につながっていると考えると、諏訪信仰の主祭神であるタケミナカタは日本海から姫川（沼名川）を上がってやってきて諏訪に入ったと考えるのが分かりやすい。タケミナカタの「タケ」は、たけだけしい、勇猛なという意味の褒め言葉であり、「ミナカタ」は「水渦」と書き表すことができるため諏訪湖そのものを指しているのではないかと考えられる。諏訪大社の上社と下社が諏訪湖を挟んで北と南にあることから考えても、タケミナカタは諏訪湖を神格化した神ではないかと考えられる。

5 . 高志と日本海文化

タケミナカタと同じようなルートを通して高志へやってきた神様がいる。それはタケミナカタの父とされるオホクニヌシ、別名ヤチホコである。ヤチホコという名前の由来としては、たくさんの立派な矛を持っているという意味である。そのヤチホコは又ナカハヒメという女神と結婚する。

二人が結ばれるいきさつはこうである。ヤチホコは、出雲には良い結婚相手がないというので、あちこち奥方を探し求める。そして高志の国に又ナカハヒメという賢くてかわいらしい女性がいるという噂を聞きつけて、はるばる出かけていき、又ナカハヒメが寝ている部屋の戸をがたがたと押しながら求婚した。しかし一向に戸を開けてもらえず、キジや鶏が鳴いて明け方になってしまった。怒ったヤチホコは、こんな鳥などたたきのめして殺してしまえと付き人に命じたのだ。そういったいきさつを歌にして、部屋の戸越しに又ナカハヒメに向けて歌ったという。

そんなヤチホコに対して、又ナカハヒメが歌を返している。「自分はしなやかな草のような女なので、心が落ち着かず悩んでいる。将来あなたの思う鳥になりますから、どうか鳥は殺さないでください、待ってください」と呼びかけたのである。つまりこの話は、ヤチホコが家来を連れて求婚するも拒まれてしまい、又ナカハヒメと戸を挟んでやり取りをするというものである。その後、世が明けてまた次の夜になったとき、ヤチホコは再び又ナカハヒメを訪ね、とうとう二人は結ばれることとなる。

ヌナカハヒメという名前の意味は「ヌ」が玉、すなわち翡翠であり、「ナ」が「～の」という意味、そして「カハ」は川、「ヒメ」は姫となる。つまり翡翠の川を守る姫という意味があるのだが、その翡翠が実は糸魚川という土地と深いつながりがあるということが昭和の時代になってわかってきた。古代で翡翠が採れたのは、東アジアでは姫川（沼名川）の上流の小滝川と、隣の青海川の上流域だけである。それが海へ流れ込み波に砕かれて打ち上げられ富山の方の海岸にまで広がっている。加工された翡翠の分布は北海道から長崎まで幅広く、高志を中心にして交易圏があった。そのようにして翡翠は、日本列島はおろか朝鮮半島にまで渡っていくことになったのだ。

ヤチホコがヌナカハヒメを手に入れ、生まれた子が美保神社の祭神であるミホススミ(現在の祭神はコトシロヌシ)ということになっている。また、諏訪湖に追い払われたタケミナカタは、古事記では逃げたということしか書かれていないが、先代旧事本紀ではヌナカハヒメの子ということになっており、諏訪地方の伝承においてもそう伝えられている。



6 . 日本海文化を考察する

美保神社では、国譲り神話を基にした青柴垣神事という祭りが4月7日に行われており、12月3日には諸手船神事という祭りがあり、船こぎ競争が行われている。丸太から作った割り舟をこぐのだが、これは、沖縄のハーリーや長崎のベーロンとつながり、対馬海流に乗って西から出雲へ入り込んでいる日本海文化における一つの特徴ではないだろうか。西

の方からの日本海文化圏というものが確かに存在していることは、南の海でしか見られないゴホウラ貝で作った腕輪が北海道の伊達で発掘されている例からも明らかになる。恐らく、古くは縄文時代から日本海を通路とした交易が行われていたのは間違いがない。

そういった日本海文化圏の中でも特に重要なのは、九州の博多湾に浮かぶ志賀海島を本拠とする海の民、阿曇（アツミ）氏である。この一族は日本海を東に移動し、姫川を遡って現在の長野信州に入って定住したといわれている。諏訪湖近くの安曇野と呼ばれる地は、まさに阿曇氏に由来していると考えられるのだ。

同じく、九州沖ノ島の有名な海の民宗像（ムナカタ）氏一族も重要だと思われる。この宗像という名前は、タケミナカタの「ミナカタ」と同じ語源ではないかとも考えられているのだ。このようなことから、九州から内陸の諏訪へ行くルートを考える上でも、日本海文化という概念なしには語れない。そして、これらの海洋民一族が交易に大きな役割を果たしていたと考えることができる。



巨木を建てる文化、翡翠、素環頭鉄刀、四隅突出型方墳の分布などからも推測できるように、阿曇や宗像などの海洋民が日本海文化圏を形成して東西をつないでいたとすれば、南は沖縄から、そして朝鮮半島やシベリアなども含めて日本海をめぐる文化を考えていかなければならない。こういったルートは縄文期から存在していたのである。

糸魚川からずっと南へつながっていく縦の内陸ルートは、現代のわれわれの認識にはないもので、普段はあまり意識もしないのである。しかし、古い時代には周知のものとして

認知されていた一つの大きなルートだった。高志を起点として信濃へつながっている道筋が確かにあり、出雲、高志、諏訪の関係を意識するという考え方は、考古学においてはもはや目新しい考えではない。それどころか、いまや通説となっている感がある。

世間一般的にはまだまだ日本海文化という概念が認識されていないようだが、間違いなく出雲、高志、諏訪を結ぶルートがあったということであり、それを神話研究に結び付けていくことは大変重要であると思う。タケミナカタが国譲り神話の中でタケミカヅチを恐れて逃げていった道筋を考えても、やはり姫川を通っていることがはっきりしてきて、出雲と諏訪とのつながりが浮き彫りになってくるのである。

このように考古学や歴史学の助けを借りながらさまざまなことを考えていくと、今までとはとても思いつかなかったような古代の世界が、新しくありありと見えてくる。今日お話ししたことは新説ではなく、考古学や歴史学におけるさまざまな発掘や研究の成果を通して、私なりに古代文学の中で整理をし直すことによって見えてきたものである。

